

## 27歳から28歳になって、思うこと、覚悟と、これから

第9期OB 渡邊 光平

27歳にもなると、一般的に、オトナはとかく様々なお悩みを持つものらしい。

そりゃそうだ。30代がドアをコツコツとノックする音が寝ても覚めても迫る年齢なわけで、周りを見渡せば結婚、出産、出世、おうちを買ったよ、ボーナスがいくらだよ、その他大勢のいろんな情報に溺れながら、沸き立つ焦りをぐいと呑み込んで、ノーダメージを装う日々なのだ（友人談）。

それにくらべると僕はどちらかといえばマイペースな性分なので、そういう悩みを超越して生きているつもりなのだけど、僕だって焦りを感じることはある。ジミ・ヘンドリックスもカート・コバーンもエイミー・ワインハウスも、みんな27歳で他界している。僕の学友である奥山由之は27歳にして時の写真家だし、同じく大学時代の音楽サークルの仲間は世界ツアーを行うくらい売れているバンドをつくった。あんまり詳しくないのだけど、かの有名な天草四郎さんは17歳でこの世を去ったそうだ。僕は、彼らのように有名になりたいという気持ちはそんなになくて、というよりも、僕には何ができるんだろうか、何が遺せるんだろうか、という自分との戦いがしたくて、そして自分の力で生きてみたくて、なによりもそういう可能性に賭けてみたくて、大学卒業後に無事就職した銀行をたった2年で華麗に退職したものだ。

退職後の僕は、専門学校に入学し、グラフィック・デザインを学びながら、写真と音楽にのめり込みました。写真はゼミ生の時に飲み会で楽しく撮っていた程度だし、音楽に至っては完全に趣味と割り切っていた。それらを今後の人生の中心に添えるっていう覚悟を決めるのは、そんなに容易くはなかったけれど。

そうして迎えた27歳。独学ながら必死に勉強した甲斐あって、今は広告プロダクションで芸大卒の生粋の写真エリート達と凌ぎを削り合うフォトグラファーとして修行の日々を送っています。大学生の頃から組んでいるフューチャーファンクバンド“ディープファン君”は、フジロックこと“FUJI ROCK FESTIVAL 2017”ルーキーステージに大トリで出演、テレビやラジオに出演と大忙しの一年でした。

意外と、打てば響くものだなあ、フジロックなんて、富士山でやるもんだと思っていたよ（本当は苗場）、なんて、友人の前では余裕を装ってみたりするのだけど、当の本人は身体がいくつあっても足りないくらいいしゃかりきに動き回って、なんとかここまでたどり着きました、というのが本音です。実際、写真を撮って、現像して、曲を作って、演奏して、レコーディングをして、MVを撮影して、編集もして、デザインもして、ウェブサイトも運営して、もちろんちゃんと毎日会社で働いて…なんていう毎日なのです。

だけれども、撮ってあげたモデルや女優がその写真を使って有名になっていくのはやはり得難い喜びがあるし、まだまだ小さいながらも音楽を通じて現代の音楽業界において“シーン”を確実に切り開いているという実感は、僕がまだ銀行員だったら想像もつかなかっただろうな、と思うのです。もちろんまだまだ修行の身であるし、全ては始まったばかりだし、半年もしたらこのバンドは見向きもされなくなるかもしれない。僕は眼があまりよくないから、写真も撮れなくなってしまうかもしれない。明日になったら、やっぱり証券マンになるんだ！なんてぬかしているかもしれない。ですが、やっとの思いで掴みかけた、自分の力で生きていくというこの生活、燃え尽きてしまわないように、大切に育てて生きたいと思います。

エッセイの締め切りを2日も過ぎた今夜、思い立ってこの原稿に手をつけたのは、僕の最愛の友人でありディープファン君を率いるソウルメイト、スルガアユム（29歳、職歴なし、投獄経験あり）から、彼の10年来の恋人（銀行員、親は開業医、1人娘）が新しい命を授かったこと、そして、俺結婚するんだと、いい知らせをくれたことがきっかけです。28歳になった僕は、これからどうなってしまうのだろうか？



# ディープファン君

ディープファン君と知らない人たち。りんご音楽祭 2017 にて（著者は前列中央）

ロゴタイプデザインは著者 (<http://koheiwatanabe.com>)

(<http://deepfunkun.com>)